

『管理会計 - 価値創出をめざして - 』（税務経理協会、2001年3月）

経営学部教授 上 埜 進

会計的コンセプトに立脚し作成した情報を経営管理の用に供することを第一義とする管理会計は、企業経営の共通言語として経営管理スキームの中核を占める。「管理会計」という主題、ならびに「価値創出をめざして」という副題を持つ本書は、ビジネス社会や学界で育まれてきた管理会計のウィズダムの中から、企業価値の創出を支援するスキルとコンセプトを抽出し、著者が考える理論フレームワークの中に、それぞれを描き出したものである。

周知の通り、極めて状況依存的な管理会計実務は、社会通念、ビジネス環境、個別企業の特性、支配的な管理スタイル等の多様な要因の影響を受け、メタモルフォーゼを繰り返してきた。管理会計の実務を記述する、あるいは実務家を啓蒙するといった意図をもって、20世紀初頭に実務家の手により生み出された管理会計の理論（管理会計論）もまた、時代と環境のダイナミズムならびに研究者の関心の推移を反映しながら領域を拡大し、知見を集積してきた。大学研究者による管理会計研究のパラダイム・シフトは特筆に値する。社会科学を精密科学にしたいとする論理実証主義の第二次大戦後に見られた影響の高まりは、ファイナンス、数学、情報科学等の理論に依拠した、あるいは、行動科学や社会学のコンセプトや知見を取り入れたモデル・ビルディングとその経験的検証を1960年代以降の管理会計研究のメイン・ストリームに押し上げた。しかし、学問としての厳密性を求める余り実務から乖離してしまった研究への反省は、1980年代以降、実務を見据えた研究、あるいは実務に貢献できる研究へと回帰する潮流を生み出した。

現時点における管理会計（論）のコンベンショナル・ウィズダムをこうした変遷を明確に踏まえて整理したいとの意向を持ち続けてきた著者は、前書『日米企業の予算管理 - 比較文化論的アプローチ』（森山書店）を出版した直後から、本書の執筆に取り組んできた。本書は、「管理会計の基礎」、「利益管理会計」および「原価管理会計」という3つの編、合計17の章からなる。第1編「管理会計の基礎」では、企業経営と企業会計、財務諸表の様式と解釈、様々な原価概念、損益分岐点分析、差額原価分析、投資決定（資本予算）の方法といった管理会計のベースをなすトピックスを論じた。また、「利益管理会計」と題する第2編は、経営戦略に関する記述からスタートし、企業価値や株主価値といったコンセプトとその経営への導入、そして、経営計画と予算管理へと記述を進めた。また、分権制組織や多国籍企業の利益管理についても検討を加えた。

第3編「原価管理会計」では、企業活動の現場で展開される原価管理技法である標準原価管理、活動基準原価管理、原価企画、原価改善等を論じた。加えて、近年、関心が高まっているライフ・サイクル・コスト・マネジメント、品質原価管理および環境原価管理にも言及した。

想定する本書の読者層は、21世紀の日本社会を担う学部の三回生、四回生、修士課程および博士課程の学生である。IT革新の成果を教育に取り入れる米国会計学教育の新潮流を意識し執筆した本書は、管理会計の最新の知識とスキルを提供するだけでなく、企業経営に要求される洞察力を育むであろう。制度会計のビッグ・バンや経営・会計実務の新潮流に適切に対処するために管理会計の最新の世界を鳥瞰したいとお考えのCFO(chief

financial officer)、経理担当者、ならびに公認会計士・税理士の方々にも本書をぜひ読んで頂きたい。